慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	子規の俳句革新における新季語：「新行事」題を例に
Sub Title	
Author	福井, 咲久良(Fukui, Sakura)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2014
Jtitle	三田國文 No.59 (2014. 12) ,p.31- 43
JaLC DOI	10.14991/002.20141200-0031
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20141200-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

子規の俳句革新における新季語

――「新行事」題を例に――

福井　咲久良

はじめに

正岡子規は明治二五年からの俳句革新を、旧派を古くて「陳腐」、それに対し自らの一派は「新奇」であるとして、旧派を批判する形で展開した。

その際、子規が何を基準に旧派を「陳腐」と判じたのかについては、青木亮人氏が「古人の類句」の多寡がその基準となった形跡があると指摘している。[1] この点から言えば、単純に考えて「古人の類句」が理論上殆ど存在し得ない明治の新題を季語[2]として詠んだならば、「新奇」な句になり得たはずだという推測も成り立つ。ところが、明治三一年、子規の校閲による日本派初の類題句集『新俳句[3]』の新題採用状況を見ると、先行する旧派の類題句集と比較してかなり慎重である。

子規の新季語採用の慎重な姿勢については、『新俳句』についてに限らず、これまでも先学が指摘している。柴田奈美氏は、「バナナ」、「ラムネ」などの新季語を個別に検討し、それぞれについて市民生活や文芸作品への定着を見極めた上で新季語として発表している点に、子規の慎重さと革新性を指摘できるとした。[4] 確かに、新題の季語としての採用の問題については、新季語を個別に見るという視点ももちろん重要である。が、新季語を性質や傾向で分類し、傾向ごとに分析する視座も必要ではなかろうか。つまり、本稿で扱う「新行事」のように、季の定まりやすいはずの語、「風船」などのように、季の定まった過程の判然としにくい語、その中間的な存在で、「手袋」のように、感覚的に季が分かるが、暦に裏打ちされている「新行事」ほどは明確な季感の後ろ盾を持たない語などのように、新季語をいくつかの系統に分類し、各々について検討することも必要なのではないかと考える。本稿ではその第一歩として、特に明治の「新行事」を詠んだ句に焦点を当て、子規の旧派批判の根底にあった意識や俳句への新季語導入に対する意識について考察を試みたい。なお、他の傾向の新季語の問題や、秋声会はじめ他の新派の動静については、別稿を期したい。

なお、本稿でいう「新行事」とは、明治の新行事や政府によって復興された行事に加え、「一月」「一日」など、行事とは言い難いが実施日が定まっている点で行事と共通するものまで含めることとする。

さて、左は、明治三〇年三月八日、子規が虚子宛てに書き送った手紙の一節である。

三川の発起にて「日本」の俳句等を出版せん（民友社より）との事小生も賛成致候冬の部だけ先づ版にせんとて小生只今校閲中也

此中へ冬帽　手袋　やきいも　毛布　襟巻　冬服　ストーヴ等の新題を季ノ物と定メテ入れんとす　貴兄も此題にて御つくり被下度御送附願上候　尤も最初の事故之を季に入れたりと見するにハ他の冬の季を結ばぬ方よろしと存候[5]

『新俳句』は、先学が指摘するように子規が選句に深く関与していることや[6]、また右の手紙の中で子規が冬の新題を「季ノ物」として取り込むことを画策していることから、題や句の選定に子規の当時の見識や意向が色濃く反映されたものと考えられる。したがって、当時の子規の新季語に対する意識を考察する上でも重要な資料と位置づけられるだろう。

『新俳句』は書名に「新」を冠しながらも、「一月」を春とする旧暦準拠の体裁をとっており[7]、また新題の採用も冬季に集中していて[8]、先行する旧派の歳時記や類題句集に比して限定的だという特色を持っている。

季の問題が絡んでくる他の新題と違って、実施日が定まっている「新行事」は、季語としても取り込みやすかったと思われる。現に子規自身も次のように述べている。

古来季寄に無き者も略々気候の一定せる者は季に用ゐ得可し例へば紀元節、神武天皇祭等時日を一定せる者は論を俟たず[9]

また、後掲するが「天長節」等については子規自身の句作例も残っている。しかし、『新俳句』での「新行事」題の立項は「クリスマス」「一月」の他見られない。

それに対し、旧派では当時すでにこれら「新行事」題を類題句集や季寄せに多く取り入れていた。旧派の明治新題の取り込みの姿勢は明治一〇年前後から確認できる。例えば、明治一四年刊、教林盟社周辺で編まれたとされる『俳諧開化集[10]』は、旧派の中でも先進的かつ網羅的に新題を取り込んだ類題句集であるが、これは下巻の「発句の部[11]」に一三九の新題を立項している。そのうち「新行事」題にあたるものは、左の表に掲げた十一題から「クリスマス」を除いた一〇題である。

【表】旧派季寄せ等における「新行事」題の採用状況

①『ねぶりのひま[12]』四睡庵壺公編、明治七年（表中「①ねぶりのひま」）※太陽暦による初の句集

②『俳諧貝合』能勢香夢編、明治七年八月、福井酒井文栄堂（表中「②俳諧貝合」）※太陽暦による初の季寄せ

③『新編俳諧題鑑』横山利平著、三森幹雄校、明治九年二月、三森幹雄・伊藤有終刊（表中「③題鑑」）

④『明治増題俳諧新部類』浜真砂著、岩波其残校、明治一三年三月、上諏訪藤森平五郎刊（表中「④新部類」）

⑤『新題季寄俳諧手洋灯』萩原乙彦編、明治一三年六月、千葉正文堂・東京玉海堂（表中「⑤手洋灯」）

⑥『明治新撰俳諧季寄鑑』山内梅敬編、花之本芹舎校、明治一三年七月、京都隅永真助刊（表中「⑥季寄鑑」）

⑦『俳諧発句早合点』萩原乙彦著、明治一四年三月、静岡文正堂（表中「⑦発句早合点」）

⑧『新撰掌中俳諧季寄大全　乾』明治一五年一月、松田文書堂（表中「⑧季寄大全」）

⑨『季寄部類俳諧発句早学』秋月亭寛逸編、清水庵五岳閲、明治二五年九月、弘業舘（表中「⑨発句早学」）

⑩『絵入俳諧季寄手引草』一事庵史栞編、細鱗舎松江閲、明治二六年一月、弘文舘（表中「⑩季寄手引草」）

【表】明治「新行事」題の旧派季寄せ等への採用状況

	一月	一日	元始祭	紀元節	陸軍始	春季祭	神武天皇祭	秋季祭	神嘗祭	天長節	クリスマス
①ねぶりのひま 明治７年	△	△	○	×	○	×	×	×	×	×	×
②俳諧貝合 明治７年８月	○	×	○	○	×	○	○	○	×	○	×
③題鑑 明治９年２月	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	×
④新部類 明治13年３月	×	×	○	×	×	○	○	○	×	○	×
⑤手洋灯 明治13年６月	△	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
⑥季寄鑑 明治13年７月	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×
⑦発句早合点 明治14年３月	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	×
⑧季寄大全 明治15年１月	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
⑨発句早学 明治25年９月	△	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×
⑩季寄手引草 明治26年１月	△	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×
新俳句 明治31年３月	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○

〈凡例〉
○：有
×：無
「一月」の△：いち季語ではなく部立名として登場
『ねぶりのひま』の「一月」「一日」の△：「一月一日」として登場
『新俳句』の「一日」の×：「一日」ではなく「元日」として立項
『新俳句』の「天長節」の×：立項なし。「秋詞書之部」に「天長節」を前書とする３句はあり

右の表は、これらの「新行事」題が、『新俳句』に先行するいくつかの旧派の季寄せや類題句集でも立項しているかをまとめ、傾向を概観し、さらに『新俳句』と比較したものである。

ここからは、旧派のとる傾向に比して、『新俳句』の「新行事」題の採用態度がかなり消極的であった様相が窺える。

一　旧派の「新行事」詠
――『俳諧開化集』を中心に

では、旧派の「新行事」詠は、実際のところ、どのようなものであったのだろうか。本章では当時の旧派の傾向を知る上でも、旧派なりに先進的な傾向を知る上でも適当な書と考えられる『俳諧開化集』「発句の部」の収録句を中心に取り上げ、旧派の「新行事」詠の特色について検討したい。

左は、『俳諧開化集』の「一月」項の句の全部である。

①一月や長閑とおもふ気はこゝろ　詢蕘斎
②山家へも来る一月や梅つばき　二洲
③一月を冬ともせぬや梅の花　左岳
④一月はまたあたらしき寒さ哉　文礼
⑤一月や寝倦しやうな牛の臭　唫風
⑥一月と成けり雪の中ながら　梅宿
⑦一月の床や寒菊添て花　林華

「一月」は年頭の月を新暦で指す呼称で、旧暦では「正月」と言うのが一般的であった。『俳諧開化集』と同じく教林盟社周辺で編まれたとされる『ねぶりのひま』の「新年の題」の一覧の末尾には、「正月又は元日、御代の春、けさの春の類を用ひて、流行おくれの名をとる事なかれ」と書き添えられているので、教林盟社社中では特に「正月」は旧暦、「一月」は新暦が強く意識されたものと考えられる。

続いて、煩雑ではあるが、各句が「一月」をどのように句の中に詠み込み処理しているかを見ていきたいと思う。

①の句には、「一月」以外に「長閑」という春の季語も詠み込まれている。句意は、新暦の一月は実質まだ冬であるのに、つい長閑な気がしてしまうというものである。しかし、その前提には旧暦の正月が春であったという事実がある。そのために「一月」と聞くと旧暦の「正月」が想起されるのであろう。つまり、この句の作者は、旧時代の常識を捨て切れていないものと読みとれるのである。このような傾向は他の句にも看取される。

例えば③の句は「一月」を冬と思わずに、春の花である梅の花が咲いているという句意であるが、これも元々旧暦の正月が春であったことを前提として考えているからこそ、冬の季語である「帰花」などを使わずに、「冬ともせずや梅の花」と詠んでいると考えられる。④の句も、旧暦の正月ならば春だから新年と同時に暖かさがやってくるはずなのに、新暦の一月は実質冬であるから、新年と共にやってきたのは寒さであるという句意だと考えられる。⑦の句は、旧暦の正月であれば、春の花を床の間に飾れるところであるが、新暦の一月では実質冬であるため寒菊くらいしか咲いていないので、せめてそれを新年に飾る花としようという句意であると解せる。

⑥の句は、雪の中でありながら一月になった、という句意であるが、新暦の感覚で読めば、新暦の一月は実質冬であるので、雪のもつ冬の季感との間に齟齬はなく、「ながら」という措辞は無意味になってしまう。よってこの句も、旧暦の正月が春であったことを前提としなければ解釈しがたいものと思われる。

加えて、このように解釈してくると、⑥の句には、古典の趣向を応用して明治の新事物を詠むという手法も指摘できるかと思う。類例については後述するが、この句の場合、趣向は『古今集』巻頭歌「年の内に春は来にけり一年を去年とや言はん今年とや言はん」に代表される、「年内立春」の詠み方に大変似通っているように思われる。「年内立春」は冬と春の間やずれを知的に愉しむ趣向である。これは、⑥の句のもつ趣向と共通していると言えるのではないか。つまりこの句は、旧来の「年内立春」の趣向を、新暦と旧暦のずれに応用したものと思われるのである。子規は、『再び歌よみに与ふる書』の中で先掲の『古今集』歌を取り上げた際、「日本人と外国人との合の子」のように「しやれにもならぬつまらぬ歌に候」[13]と評して非難している。したがって、⑥の句に限らず、旧時代の季感を捨てきれず、むしろそのずれや間を知的に愉しまんとする、先掲の「一月」項のような性質の句についても、同様の批判を抱いたであろうことは想像に難くない。

このように、『俳諧開化集』「発句の部」の「一月」項の句は総じて、類型的に旧時代との常識のずれ、旧時代と新時代の暦のずれを知的に処理したものと見ることができる。

このような傾向の句は、『俳諧開化集』の他の「新行事」項の句にも見られる。例えば、

⑧御代なれや 一日 とみな言覚え　詢蕘斎　（「一日」項）

は、明治天皇の時代となって、年始の日を『ねぶりのひま』が「流行おくれ」とした「元日」ではなく、「一日」と呼び覚えるようになったという句意であると考えられる。また、同じく『俳諧開化集』「一日」の項に収められる

⑨ 一日 や寒さおさへる日の光り　完鷗　（「一日」項）

という句も、旧暦ならば春の日差しであるはずの「一日」の光であるから、「一月」の冬の寒さを和らげるのだと解することができるだろう。

また、『俳諧開化集』に限らず、『ねぶりのひま』にも「一月」の部に次のような句が見える。

⑩ 一月 も七日たちけり寒の梅　沙山

一月に入ってもう七日が経ったが、寒梅が咲いているという句意であろう。この句も、旧暦の正月であれば寒梅ではなく梅が咲くものだということを前提とし、新暦の一月は実質冬なので寒梅が咲いているとしたと考えられる。

また、同じ「一月」の部の、

⑪ 一月 は花の春まつはじめ哉　精知

の句も、旧暦の正月ならば花の春そのものであるということを前提とし、新暦の一月は実質冬であるから、花の春を待つ年始めということになる、と詠んでいると考えられる。このように、いずれの句も、旧時代と新時代の暦のずれを知的遊戯のように詠んでいると考えられる。

さて、次に挙げるのは、先の⑥の句の検討の折に触れた、従来の古典的趣向や詠み方をつかって「新行事」を発句に取り込もうとした例である。

⑫積雪も貢ぎとうたへ 元始祭　二洲

⑬ほの〴〵とよき雪晴や 元始祭　黙平

（以上『俳諧開化集』「元始祭」項）

⑭拍手にうちこむ雪や 紀元節　　蘆水

⑮旭に向ふ烏の声や 紀元節　　梅宿

（以上『俳諧開化集』「紀元節」項）

⑯式の日や霰たばしる帽の上　　永機

（以上『俳諧開化集』「陸軍始」項）

「元始祭」は明治五年制定の皇室行事で、毎年一月三日、天皇の位の元始を寿いだものである。「紀元節」は、「日本書紀」が初代人皇の神武天皇即位の日とする一月一日を、太陽暦に換算したという二月一一日を祝日と定めたもので、同じく明治五年に制定された。「陸軍始」は旧日本陸軍で毎年一月八日の仕事始めの日に行なった観兵式などの儀式を指す。

⑫⑬⑭の三句は、いずれも雪を詠み込んでいる。季節的に雪の降る時期であるためもあろうが、このようにめでたいことを雪とともに詠むという詠み方は、『万葉集』巻末歌「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事[14]」などから先例が見られる。⑫には、積もる雪を「貢ぎ」と称えよという内容が詠まれるが、これは「雪は豊年の貢ぎ」などという知識に基づいている。謡曲「難波」には、仁徳紀を引用する場面で「浜の真砂の数積もりて、雪は豊年満作の御調物[15]」のように引用されており、定型表現として広く認知されていたことが窺える。また『ねぶりのひま』収録句の

⑰ 一日 や雪もめでたきものゝ数　　得水　（「一月」の部）

にも、同様の趣向を看取できる。

続いて、⑮の句には烏が登場するが、これは神武即位前紀の神武天皇が烏に導かれた話に基づいていると考えられる。また⑯の句の場合、「陸軍始」という語を詠み込んではいないが、「もののふのやなみつくろふこてのうへに霰たばしるなすのしの原」（『金槐和歌集』三四八）という実朝歌を踏まえることで、「霰」という旧来の季語を得て有季という発句の条件を満たし、さらに「こて」を軍帽に詠みかえて当代の陸軍らしい一句に仕立てたと考えられる。

先行する古典作品が踏まえられていると目される例は、明治一二年刊、明倫講社の三森幹雄が編者を務めた『俳諧新選明治六百題[16]』にも見いだせる。

⑱ 元日 やけふりの立ぬ家もなし　　清制

（歳旦之部（冬）「元日」項）

この句の、元日というめでたい日に竈の煙が上らない家はないという趣向は、『新古今集』巻第七（賀）巻頭歌「たかき屋にのぼりてみれば煙たつたみのかまどはにぎはひにけり」や、仁徳紀を踏まえてのものと考えられる。また、「新行事」には当たらないが、『俳諧開化集』には次の句も載る。

⑲御旗日や賤が竈も賑はしき　　可洗　（「国旗」項）

右の句も、「賤が竈」の賑わいを詠むことで「御旗日」を寿ぐ趣向である点に着目すると、先出の⑱と同様に「仁徳天皇御製」を踏まえていると考えられる。「新行事」の執り行われる日は多くが「御旗日」でもあるので、「新行事」と同様の傾向を示すことも首肯できよう。

続いても、『俳諧新選明治六百題』からの引用である。

⑳ 一月 の花とはなりぬ今朝の雪　　柳叟

（歳旦之部（冬）「一月」項）

右の句の、年の始めに木に雪が降りかかって花に見えるという趣向自体は、「雪の木にふりかかれるをよめる」という詞書の素性法師の和歌、「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく」（『古今和歌集』春上・六）を始めとして和歌に多く見られる。⑳の句は春の雪を詠んだ旧来の歌や句の趣向を、そのまま実質的に冬である新暦の「一月」の句に応用したものではなかっただろうか。

さて、以上に加え、旧派の「新行事」詠には、旧来の季語に寄りかかった趣向のものも見られる。

㉑陸軍や朝日かゞやく事始　　春湖　（「陸軍始」項）

右の句は『俳諧開化集』の「陸軍始」項に載る句である。陸軍の仕事始めが朝日輝く中で執り行われているという句意と思われるが、この句では「陸軍」という語に「事始」という旧来の季語を併せることで、有季という発句の条件を満たしつつ、「陸軍始」を表現している。この点は、やはり「陸軍始」項に掲載の、先出の⑯の句が、「霰」という旧来の季語を詠み込むことで有季という発句の条件を満たしていたことと重なってくる。

ところで、「事始」という季語は元々、軍事に関することでも、特に年頭行事を指したものでもないとされる。[17] しかし、この句においては、「陸軍始」をも「事始」のバリエーションのように捉えていると読むことができる。このように旧来の季語を応用して新事物を詠むという手法は、『俳諧開化集』において、「新行事」以外の新事物を詠んだ句にも見られる。例えば次の「西洋餝」項に見られるような例である。

㉒樫の葉も常磐の色よ門飾　　漣々
㉓青柴に木の実もまぜて門かざり　　蘆水
㉔交りの丸きを門のかざりかな　　菟好

（「西洋餝」項）

「西洋餝」は『日本国語大辞典』第二版には、「祝祭日などに、造花、テープその他を用いてつくりあげるアーチ式の装飾など」とあり、正月に限ったものではない。が、これらの三句は、「西洋餝」を、㉒㉓の句では素材の面で、㉔の句では形状の面で特殊な、「門飾」として表現していると解せる。[18] つまり、「西洋餝」を旧来の季語である「門飾」のバリエーションのように捉えて、「門飾」の中に含み込もうとする態度が窺えるのである。

「陸軍始」の例、さらに「西洋餝」の例からは、一見全く新しい素材を取り込んでいるようで、実は旧来の季語の概念を基盤とし、その上に新素材が詠み込まれたに過ぎなかったという様相が見えてくるのではないだろうか。

以上見てきたように、旧派類題句集の「新行事」詠からは、

Ⅰ　旧時代の常識的感覚で、もしくはそれとのずれを楽しむ
　かのように新時代の新常識を詠む
Ⅱ　古典の趣向を応用して明治の新事物を詠む
Ⅲ　旧来の季語を応用して明治の新事物を詠む

という、少なくとも三つの傾向を看取することができた。このように、旧派による「新行事」の取り込みは、一見革新的なようでありながら、その実態は、近世俳諧が俗語や新語を取り込んできたこととあまり変わらなかったように思われる。子規は

この辺りを見抜いていたのではないだろうか。

二　日本派の新行事詠――子規を中心に

ではここからは、子規を中心に日本派の「新行事」詠について検討していきたいと思う。

子規の「新行事」詠としては、「紀元節」「天長節」「クリスマス」詠が確認できる。[19] 宮坂静生氏によると、明治三〇年三月には『新俳句』「冬之部」の子規の校閲が始まっていたので、[20] ここからはそれ以前の句を対象とすることとする。

左は『新俳句』に先行する子規の「天長節」詠である。

㉕宿の菊 天長節 をしらせばや（明治二五年）

（『寒山落木』巻一、引用『子規全集』一巻）

㉖海晴れて 天長節 の日和かな（明治二七年）

（「日本新聞」明治二七年一一月三日、引用『子規全集』四巻）

㉗草の戸や 天長節 の小豆飯　（明治三〇年）

（『俳句稿』明治三〇年、引用『子規全集』三巻）

㉘唱歌聞ゆ 天長節 の朝日哉　（明治三〇年）

（「日本新聞」明治三〇年一一月三日／『俳句稿』明治三〇年、引用『子規全集』三巻）

㉙畑打の 天長節 を知らぬかな（明治三〇年）

（『俳句稿』明治三〇年、引用『子規全集』三巻）

㉕の句は、天皇の象徴である「菊」と「天長節」を結んだ句であり、この点で旧派の「天長節」詠

㉚上も無き日がらを菊の盛哉　　藍庭

（『俳諧開化集』「天長節」項）

などと発想の共通する句と言える。また、㉖の「天長節の日和」も、先掲の㉚、旧派の句の「上も無き日がら」とほぼ同義である。さらに、明治三五年刊の日本派の類題句集『春夏秋冬』「秋之部」[21] には、左の㉛のように、中七、下五の詞章が㉖と全く同じ句が収録されている。

㉛年々に 天長節 の日和かな　　鳴雪

つまり同じ日本派の中で、比較的近い時期に類似句が作られていたことになる。

㉘の句の「天長節」と「朝日」を結ぶ発想は、旧派に、

㉜かゞやくや 天長節 の朝日かげ　月窓

（『俳諧開化集』「天長節」項）

のような先行例がある。また「唱歌」については、この句の指す唱歌「天長節」[22] を含め、小学校の儀式用の唱歌が「祝日大祭日唱歌」として公布されたのが明治二六年であるので、㉘の句が作られた明治三〇年当時は、「天長節」に唱歌はつきものだと言えるほどではなかったのかもしれない。しかし、このとき「紀元節」「神嘗祭」などの唱歌も同時に公布されており、他の祝日の句でも用いられうる素材であったとも言えよう。

以上のように見てくると、旧派との発想の差異が殆ど見られない句が多くを占めているような印象を受けるが、中には類想を脱しているように見受けられる点を持つ句も見られる。

ここまで取り上げてきた旧派の「天長節」詠は、先掲の㉚や㉜のように、この上ないめでたさを華やかに詠むものであった。これに対し、子規の詠である㉗は、侘び住まいで「小豆飯」を炊いて祝う天長節を描いている。そもそも天長節に限ら

ず慶事などに赤飯はつきものであり、その点では類句が存する可能性は十分考えられる。現に子規自身にも、

㉝冬枯や庚申堂の小豆飯（明治二九年）

（『寒山落木』巻五、引用『子規全集』二巻）

など、天長節以外で小豆飯を詠んだ句が存し、小豆飯自体は単独で天長節の特色を表すには不十分な素材であったと言えよう。しかし、後に寒川鼠骨が「草の戸は（略）侘びたる住居である、（略）酒池肉林で祝ふよりかも却つて斯様な粗末なもので祝ふ方がゆかしい」[23]とこの句を評したように、大仰な描写をしていない点が、旧派の「天長節」詠とは一線を画しているとも言えるのではないか。

同様に、㉙は「天長節」というこの上ない祝日に、それとは知らずいつも通り畑を打っている農民の姿を詠んだものである。句中に「菊」「唱歌」「小豆飯」などの素材がないために、一句はこれまで見てきた子規の「天長節」詠の中でも特にそれらしさに欠けているように思われる。しかし、何もかもを置いて天皇を寿ぐべき日に、その日であることすら知らずいつも通り農事に携わる「大胆不敵」な農夫を詠んだ斯様な句は、俳諧教導職も多かった旧派にとって、容易く詠み得なかったはずであり、子規の狙いがそこにあったことは想像に難くない。

以上見てきたように、子規の「天長節」詠は、旧派のそれと一線を画そうとする意向や独自性が垣間見えるものも確かに散見されるが、概して、「天長節」らしく詠もうとすると類想に陥りかねず、類想を脱しようとすると「天長節」らしさを欠きかねない危うさを孕む傾向にあったと言えるだろう。

続けて、日本派の「天長節」詠も見てみよう。子規の後を引き継いで高浜虚子・河東碧梧桐が選に当たった類題句集に『春夏秋冬』「夏之部」「秋之部」「冬之部」（明治三五～三六年）[24]がある。その「秋之部」には「天長節」項が存在する。

㉞年々に天長節の日和かな　鳴雪

㉟草の戸や天長節の小豆飯　子規（㉗と重複）

㊱卓上や菊の杯菊の酒　露月

㊲軍艦に天長節の夜会かな　五城

㊳日出づるところの天子菊の宴　把栗

㊴菊の花洋々として楽起る　寒樓

㊵団欒や民喜びの菊の酒　碧梧桐

㊱㊳㊴㊵の句はいずれも、菊に関することを詠んだものであり、その点で類想的であると言える。㊲は軍艦での天長節の夜会という、かなり特殊な状況の宴を詠んでいる。よって類句は現れにくかったかもしれないが、逆を言えば、ここまで特殊な状況を詠まなければ、「天長節」詠においてなかなか類想を脱し得なかったということかもしれない。

㊳は『隋書』倭国伝の記事を菊の宴と結んで天長節の内容を表現していると読め、その点で知識に偏重している。

先に指摘した㉟（㉗に同じ）に加え、㊱の「卓上」、㊵の「団欒」、「民」といった語には、旧派の仰々しい「天長節」詠には見られなかった素朴な印象があると指摘できるかもしれない。しかしそれ以上に、㊱㊵の「菊の酒」や、㊴の「菊の花」に湧き起こる寿ぎの楽、㊵の「菊の酒」を汲む「民」の「喜び」などから受ける、語彙や発想が画一的であるという印象

は、払拭しがたいものがある。

「新行事」は表面的には新しい題である。しかし、「新行事」が負っている、あるいは明治新政府によって付与された歴史的背景は、むしろ古典的かつ伝統的なものであり、その儀式も厳粛あるいは盛大で、かつ典型的なものであることが求められた。「新行事」詠全体についてではないが、松岡満夫氏は『新俳句』の季題数、特に新年季題の少なさについて、「一般に新年の季題には古典的、時代的な臭味のあるものが多い」[25]と指摘している。松岡氏の指摘する、新年季題の「古典的、時代的な臭味」が新鮮な詩情を表わすのを阻害するのだとしたら、「新行事」題にも同様のことが言えたのではないだろうか。

つまり、本稿の冒頭で触れたように「類句」が少ないということが子規のいう「新奇」な句の十分条件であったとすると、「新行事」詠ではこの条件をなかなか満たしがたかったものと考えられる。子規が『新俳句』の新題から「新行事」題を極力外した理由は、ここにあったのではないだろうか。

ところで、明治二八年に、子規は「写生」を提唱している。[26]先掲の㉗㉙の子規の「天長節」詠（明治三〇年）の中に類句や類想を脱しているようにも見える点が看取されたのは、あるいはその論理が実践されたためかもしれない。しかし、類想を脱しきれていなかったり、脱しようとするあまりなのか、「天長節」詠らしさを失いかねない危うさを抱えたりと、その実践が不完全なものになってしまったのは、「写生」論の実践経験がまだ不十分であったためというばかりではなかったであろう。むしろ、「天長節」という「新行事」の持つ「古典的、時代的な臭味」が、「写生」論実践の足かせとなってしまったからではなかっただろうか。

さて、『新俳句』で例外的に採用された「新行事」題は「一月」と「クリスマス」であった。しかし実際に『新俳句』の「一月」項に収められている句を見ると、左のように、㊶から㊹のいずれの句も「一月」という語はつかわず、「正月」「睦月」といった語を用いている。

㊶正月や橙赤き雪の門　愚哉
㊷あら惜しや早正月も三日立つ　数鶯
㊸睦月まだ川風寒し藪の花　宗重
㊹国亡んで寺の正月僧もなし　瓢亭

（『新俳句』新年の部「一月」項）

これと同様の傾向が、子規の『寒山落木』巻四にも見られる。

㊺正月や里はきのふの古薄
㊻春王の正月書すと書かれたり
㊼うれしさの過ぎぬ正月四日なり
㊽ひもじさの餅にうれしき睦月哉
㊾正月の人あつまりし落語かな
㊿一月となりけり雪もふりにけり

（『寒山落木』「一月」項、引用『子規全集』二巻）

『寒山落木』巻四は類題句集の形式をとっているが、以上の六句はすべて「一月」という項に収められている。それを根拠に、子規が三者のつかい分けを全くしていないと結論するのはもちろん早計であろう。しかし、少なくとも旧派のような、旧

暦か新暦か、あるいは春か冬かといった区別はしていなかったのではないか。要するに、子規は「一月」を「正月」に対する新題として捉えてはいなかったと考えられるのである。この事実も、古くからの行事に関わる題において「新奇」な句を詠むことの困難さを示していると言えるだろう。

一方、『新俳句』が実質的に唯一採用した「新行事」題である「クリスマス」は、洋語でありかつ宗教色の強い語ゆえ、「古人の類句」はもちろん、先行する旧派の作例も少なかったものと思われる。[27] 子規が「クリスマス」のどのような点に新季語としての「意匠」を見出したかについては、煩雑に渡るので、洋語はじめ他の新季語採用の問題とも関連させつつ、稿を改めて検討したい。

以上から考察するに、子規は「新行事」を始めとする新題の導入が、旧派に於いては必ずしも俳句の内容の革新にまで行き届いていないことを見抜いており、加えて自らも「新行事」詠の実作を通して、「古人の類句」ならぬ「同時代の類句」の多い「意匠の陳腐なる」句になってしまうことが往々にして起こりうることをも自覚していたのではないだろうか。その意識が、『新俳句』における「新行事」題採用の慎重な態度へ繋がったと思われる。

青木亮人氏は「「意匠の陳腐なるを」避けたのが『新俳句』とすると、子規達が「類句」と異なる趣向や措辞を使用したのはむしろ意図するところではないのか」[28]と指摘するが、殊に「新行事」詠については「「類句」と異なる趣向や措辞の使用」が困難だったものと考えられる。

おわりに

ここまで、類句を避けて「新行事」題を詠むことの難しさを検討してきたが、冒頭で確認したように、子規は決して「新行事」を含む新題自体を否定していたわけではない。

子規には新題を採択する際、それが新しい季語としての「意匠」を持ちうるかの見極めが必要だったのではないだろうか。

本稿では『新俳句』以降の子規の「新行事」詠にあまり触れられなかったが、子規は「新行事」の季語への取り込みを諦めたわけではなかった。例えば病床にあった明治三二年には

㊿人も来ぬ天長節の病哉　　子規

（『俳句稿』明治三二年、引用『子規全集』三巻）

などの詠を残している。子規がこの詠をもって、類句を脱し得たと自認していたかは未だ明らかでないが、少なくとも本稿の論じてきた類句類想の存在を自覚した上での果敢な挑戦であったと見てもよいのではないか。いずれにせよ、『新俳句』以後の子規の動向については今後の研究に俟ちたい。

また今回は『新俳句』を軸に、旧派と、明治三〇年頃の子規を中心とする日本派の「新行事」詠について、比較検討してきた。本稿で扱った「新行事」題の問題を裏返せば、子規は、「手袋」や「焼芋」など、『新俳句』に採用した他の新題には「古人の類句」や同時代の類句を脱しうる、新しい季語としての「意匠」を認めていたはずだという推測も成り立つ。ではそれらは、旧派の取り込んだ新題といかに性質を異にするのであろうか。いずれにせよ、子規の俳句革新については、新題とい

う視点から今後更に追究すべきであると考える。

注

(1) 青木亮人「菊の詠みどころ―明治期俳諧宗匠と正岡子規達の作品から―」(『アートリサーチ』一〇号、平成二二年三月)

(2) 明治中期以前、「季語」ではなく、「季の題」、「季の詞」などの呼称が用いられていたが、本稿では便宜上、原則として「季語」で統一した。また、引用句中の季語を特定する際には、曲亭馬琴編、藍亭青藍補、堀切実校注『増補 俳諧歳時記栞草』(平成一二年一〇月、岩波書店)、『図説俳句大歳時記』(昭和三九～四〇年、角川書店)、および櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」(『和歌 俳句 歌謡音曲集』〈新日本古典文学大系明治編〉)の注釈を参照した。

(3) 上原三川他編、正岡子規閲、明治三一年三月、民友社

(4) 柴田奈美『正岡子規と俳句分類』平成一三年三月、思文閣出版

(5) 『子規全集』一九巻、書簡番号五三七

(6) 『子規全集』一六巻解題や、宮坂静生『正岡子規と上原三川』(昭和五九年六月、明治書院)に詳しい。

(7) 『新俳句』が旧暦準拠である背景については、他の類題句集などとも比較しながら別稿を期して考察したい。

(8) 『新俳句』の新題が冬季に集中していることについては、松岡満夫氏の指摘がある(松岡満夫「「新俳句」の成立と特色」(『國語と國文学』二九巻八号、昭和二七年八月、至文堂))

(9) 正岡子規「俳諧大要」(『日本新聞』明治二八年一〇月二七日、引用『子規全集』四巻)

(10) 西谷富水編『俳諧開化集』西谷富水刊。以下同書の引用はすべて前掲注2櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」に拠り、句の引用箇所では同書の注を参照した。なお、『俳諧開化集』という名称の書物には、五味吉次郎他編『俳諧開化集』(明治一五年一二月、長野小沢半工舎外一軒)の存在も確認されているが、本稿では前者を指す。

(11) 「発句の部」という呼称は、『俳諧開化集』中では使用されないが、本稿では便宜上前掲注2櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」の解題に従い、『俳諧開化集』下巻の発句のみを集めた部分を「発句の部」と呼ぶ。

(12) 四睡庵壺公編『ねぶりのひま』明治七年。以下同書の引用はすべて村山古郷「太陽暦と季題の関係―四睡庵壺公著『ねぶりのひま』について」(『俳句』二九巻一三号、昭和五五年一一月、角川書店)に拠る。

(13) 子規「再び歌よみに与ふる書」(『日本付録週報』明治三一年二月一四日、引用『子規全集』七巻)

(14) 伊藤博校注『万葉集』下巻、昭和六〇年四月、角川書店

(15) 「難波」(『謡曲百番』〈新日本古典文学大系〉)

(16) 三森幹雄編『俳諧新選明治六百題』明治一二年一月、高木和助出版。以下同書の引用はすべて本書に拠る。

(17) 季語としての「事始」の解説は歳時記によって説が分かれる部分もあるが、例えば、『図説俳句大歳時記 春』(昭和三九年四月、角川書店)には「二月八日。事とは、祭・祭事の意で、東日本では二月八日と十二月八日とを対照せしめて、いずれも事の日とし、一方を事納、他方を事始と称する。(略)行事としては、両度とも高い竿を屋外に立ててその先に笊の類を付けて魔除けとし、お事汁を食べるなど、ほとんど変わりがない」(鈴木棠三)とあり、軍事および年頭に関する記述は見えない。

(18) 前掲注2櫻井武次郎他校注「俳諧開化集」参照。拙稿「明治期の発句における新事物と題・季のかかわり―『俳諧開化集』を例に」(『連歌俳諧研究』一二三号、平成二四年九月)でも取り上げた。

(19) 松山市立子規記念博物館編『季語別 子規俳句集』(昭和五九年三月、松山市立子規記念博物館友の会)を参照した。子規には他に前書を「天長節六句」とし「菊」を詠んだ一連の作(『寒山落木』巻三)などもあるが、本稿の引用句からのみでも、子規の「新行事」の詠み方の傾向はある程度看取できると考えた。

(20) 前掲注6宮坂静生『正岡子規と上原三川』

(21) 高浜虚子・河東碧梧桐選『春夏秋冬』「秋之部」明治三五年九月、

俳書堂（引用『子規全集』一六巻）

(22) 「今日の吉き日は大君の、うまれたまひし吉き日なり」で始まる黒川真頼作詞、奥好義作曲の唱歌「天長節」（『祝日大祭日歌詞並楽譜』明治二六年八月、宮田六左衛門）

(23) 寒川鼠骨著『春夏子規俳句評釋』明治四〇年四月、大學堂（引用越後敬子編『子規研究資料集成〈作品評釈編一〉』平成二四年二月、クレス出版）

(24) 『新俳句』に次ぐ日本派の類題句集『春夏秋冬』（引用『子規全集』一六巻）は「春之部」（明治三四年五月、ほとゝぎす発行所）のみ子規選、「夏之部」（明治三五年五月、俳書堂　文淵堂）、「秋之部」（明治三五年九月、俳書堂）、「冬之部」（明治三六年一月、俳書堂）は虚子・碧梧桐選で刊行された。なお、『春夏秋冬』における「新行事」の立項は、「秋之部」に「神嘗祭」「天長節」、「冬之部」に「新嘗祭」が見られるのみである。

(25) 前掲注8松岡満夫「「新俳句」の成立と特色」

(26) 「俳諧大要」（「日本新聞」明治二八年、引用『子規全集』四巻）

(27) 越後敬子氏は、「耶蘇祭」の題をもつ明治期旧派類題句集で明治三一年以前に刊行のものは、①其角堂永機・雪中庵梅年編『発句五百題』（明治一五年一一月、東京　高田重助）、②其角堂永機・雪中庵梅年編『俳諧絵入八百題』（明治一七年四月、東京　松崎半蔵）、の二点と指摘しており（「明治期旧派類題句集概観」（国文学研究資料館編『明治開化期と文学』平成一〇年、臨川書店）、実際に永機と完鷗による計二句（のべ三句）の掲載が確認される。ただし、いずれの句も「クリスマス」ではなく「耶蘇祭」と詠んでいる点には注意が必要であろう。

(28) 青木亮人「「窓の灯、雪を溶かさず―正岡子規『新俳句』と「月並句」の差異について―」（『同志社国文学』七二号、平成二二年三月）

※引用に際し、旧字や異体字を通行の字体に改めた箇所や、私に傍線や囲み線などを付した箇所がある。句や句集、季寄せに付した通し番号は、便宜上私に付したものである。『子規全集』は講談社版『子規全集』を指し、和歌は『新編国歌大観』より引用した。

(付記) 本稿は平成二五年度俳文学会第六五回全国大会における口頭発表をまとめ、修正と加筆を施したものです。ご教示賜りました先生方に深謝申し上げます。